

# 全久院報

松本市深志3-7-50 電話 0263-36-3211

## あけましておめでとうございます

様の願いが届きますよう願っています。

昨年坐禅会のために、青山俊董師の従容録のコラムを読んで、坐禅の資料を作りました。コラムの中に「大宇宙のお働き」という言葉が数多く出てきます。学生の時坐禅のテキストと言われた沢木興道師も盛んに使っていた言葉です。お二人のすばらしい坐禅指導者の言葉ですから、坐禅が行き着くところはここかなと思います。

私たちの命はどこから来たのでしょうか。大宇宙に散らばった数ミクロンのホコリ(人間にとってはただのゴミ)

が何億年もかけて集まり、星雲を作り、星になりました。地球も50億年ほど前にでき、そして私という命を生み出してくれました。またいつか爆発して、数ミクロンのゴミになります。この輪廻転生が次の命をまた生み出します。

この「大宇宙のお働き」が命をはぐくむ=仏、ルール=法、つまり仏法ということになると気付いたのです。自分の命はこのお働きが生み出してくれたもので、自分の行動も自分がしているのではなく、このお働きのままにさせていただいているのです。今私たちは世界中の人と競争して、経済で勝ち抜き、政治で勝ち抜き、文化で勝ち抜き・・・、ただ勝ち抜き、成功をつかむことを生きることの最高の目標にさせられてしまいました。成功したとしてもこの競争に身も心も疲れきり、成功しなければ負け犬のレッテルを貼られる。成功してもしなくても自分の居場所が見つからないのが現代だと思います。

「大宇宙のお働き」に身を置けば、このお働きからいただいた仕事にこの身を置き、今の一秒一秒を大切に使用していただければ、同じ気持ちの人々に巡り合え、すばらしい物事に出会え、自分がかっきり見えてきます。成功するかしないか気にならなくなり、「失敗したらどうしよう」などと後ずさりすることもなくなります。昨年より始まった大屋根の大改修も皆さまのおかげで完成までもう一歩です。今年は住職になって初めて檀信徒の皆さまと大本山総持寺をお参りする計画も進めます。新たな一歩をいくつか踏み出すにあたり、このお働きの力をいただいて、皆さまと一緒に本年の諸行事を進めてまいりたいと思います。皆様の一年がすばらしい一年であることを願っております。

## 大屋根の瓦吹き替え工事

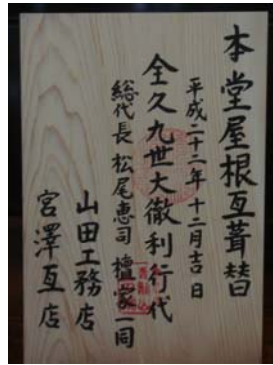
右の写真は鬼瓦を据え終えた職人さん達の安堵の表情です。鬼瓦は11ヶの部材に別れ、それぞれが50キロの重さということですから、片方の鬼瓦だけで500キロの重さになります。「梁組がしっかりしているから相当な重さの屋根を支えられる。古い瓦を全部はいだ時屋根全体が浮き上がり、揺れ

本年も多くの皆さまに除夜の鐘を撞いていただきました。様々な願いを込めてのことと思います。皆



て移動するのも大変だった」と職人さんが話してくれました。昔からの伝統の技術でこの本堂も支えられているのがわかります。

さて、皆さまの寄付をいただき、大屋根の瓦葺き替えの完成も真近になりました。今回の工事は難航を極めました。というのも、どうも明治40年に本堂が再建されてから、一度も瓦の下の屋根板を補修したことがなく、全体にひずみが来ており、それを平らにするのに大変な技術を要したのです。また本格的な瓦葺にする



ため、本峰の鬼瓦に接続するところを徐々に反り上げる葺き方をしてあります。皆さまもどうか本堂を見上げて見てください。両隅が徐々に上にカーブする繊細な美しさを感じていただけたと思います。また、鬼瓦の中に、左の写真のように今回の工事の由緒書きを入れました。何十年後かに今回の大工事があったことを伝えるものになることでしょう。

次に、本堂裏のトイレは完成しました。男性用、男性と障害をもたれた方の兼用、女性用（和式・洋式のウォシュレット有り無し）となっています。前住職の晋山式の頃、今から40年ほど前のトイレから比べると使いやすくな

ったと思います。

また、1月現在、旧台所は工事中です。下の写真は台所の壁を剥いたら下から現れた、以前の外壁です。私が小学生頃白壁だった記憶があったのですが、それが現れたのです。昔の外壁だったところの外に壁を作り増築して台所を作っていました。黒い天井も見えますが、私達はこの天上の下で、ちゃぶ台を出して食事をしてきた記憶がよみがえってきました。当時は薪をくべるかま



どがあり、母が毎朝火をつけてご飯を炊き、味噌汁を作っていたのを思い出しました。この壁や天井もしばらくすると、また新しい台所の下に隠れます。また、下水や上水道の管が古くなり使えない状態になっていました。また柱も腐っているものがあり、今まさにしなければならなかった工事だったと思います。

寄付に付きましてはまだ目標額には達していません。また思いのほか屋根板、台所の水周りの痛みがあり、工事費が予算を超過しそうなため、寄付をいただけていない100軒強の檀信徒の皆さまに再度お願いの文章を発送いたします。支払い方法などの説明も入れさせていただきますので、なにとぞご協力お願いいたします。景気が逼迫する中でのお願いですので大変心苦しいのですが、ご無理のないところでの寄付、よろしくお願いたします。

## 境内散歩 - 大黒さま -

皆様の法事の控え室にしている、机といすのある部屋から台所に向う部屋に大黒様を安置して有ります。大黒様はインドではマハー・カーラと呼ばれ、身体の色が黒いことで大黒様と呼ばれました。もともとヒンドゥー教の最高神シヴァ神の別名で戦いの神様でした。怒りの顔をしており、象の皮を後方に広げ、鹿と人間を両手にぶら下げるといふものす



ごい姿をしていました。仏教では台所に安置され、豊饒祈り、寺院の守護をする仏様となりました。中国に伝わると豊饒を司り、財宝を授ける福神となり、平安時代初期に日本に伝わって来ました。天台宗の開祖、伝教大師最澄が伝えたといわれ、福岡県の観世音寺には最澄作と伝えられる大黒様が現存しています。当寺の大黒様は今とは全く異なる姿、武装した像で、手には袋を持っていました。しかし、平安時代後期には中国的な服装となり、大きな袋を肩に担ぐ、現在の大黒様と同じ姿に変化してきました。さらに日本の神話に出てくる大国主命とも結びつき、柔和な表情を浮かべ俵の上に乗る、幸福や財産を恵む大衆の仏様になり、七福神に加えられました。本誌でも「大黒コーナー」がありますが、台所の神様ゆえ、寺の奥さんを「大黒さん」と呼ぶ慣わしが残っています。

## 全久院の集い

### 坐禅会 . . . 横綱 白鳳と坐禅会 . . .

「従容録」を勉強している中で、私たちが日常何気なく使っている言葉（例「八風吹けども動ぜず」）の起源となる問答が多く出てきます。その中で白鳳連勝と双葉山の連勝が取りざたされたのに関連する言葉が出てきました。双葉山の連勝が止まった時「木鶏未だ至らず」と言われた、と皆さまも聞かれたことがあるかと思います。

この「木鶏（もつけい）」は勝ち負けを超越した世界を説いた、「従容録」三十三則の三聖金鱗の説明に青山師が引用しています。「莊子」に出てくる、紀涪子という闘鶏師の話です。周の宣王の闘鶏を育てることを命じられた紀涪子に王が質問した。「鶏は使いものになるか」紀涪子は「まだです。むやみに強がって威勢を張っています」10日ほどして、王は「使いものになるか」。紀涪子は「まだです、他の鶏をぐっとにらみつけて気おいたちます」。10日ほどして、王は「使いものになるか」。紀涪子は「もう完璧です、他の鶏に何の反応もしません。まるで木で作った鶏のようです。無為自然（じねん）の道を身につけています。他の鶏で相手になろうとするものはなく、背を向けて逃げ出しましょう」。これが「木鶏」です。さすがの双葉山も「木鶏」には未だ至らなかったのです。

禅の修業も同様で、指導する老師、共に修行する弟子どうし、誰と修行をともにしようとあいてを気にせず、敵対するのは自分のみ。その最大の敵たる自分を無為、つまり意識せず、自然のなすがままに修行を続けている、そんな境地を「木鶏」で表現しています。老莊思想といえば無為自然。勝とうとする作為から離れられる境地、それを横綱 白鳳も極めようとしているのでしょう。

**ご詠歌** ご詠歌の県大会が昨年10月2日（土）、松本市の県民文化会館で開催されました。現在ご詠歌を練習している講員は5人ですが、全員参加しました。右の写真の前列の二人は松尾さんと滝澤さんです。白板の東昌寺副住職、飯島恵道師の指導を受け、練習を重ねての本番です。

長野県の曹洞宗寺院は第一宗務所（東北信）と第二宗務所（中南信）に分かれており、2年に一度ずつそれぞれで開催します。中南信のほうにご詠歌は盛んで、こちらが1100人、あちらが400人



というような参加者数が例年続いています。今年は私たちの宗務所が担当で、私も宗務所の庶務主事に任命されていますので、宗務所最後の大事な仕事となりました。講員の皆さんも満足行くことができたとのこと、猛練習の成果というところでしょうか。

## 仏教ミニ知識

### アショーカ王

皆さんはアショーカ王をご存知ですか？中学か高校の世界史で、アショーカ王・カニシカ王と丸暗記させられたのではないですか？アショーカ王は紀元前3世紀ころインド全域を支配していたマウリヤ王朝の3代目の王でした。近隣の諸国を支配下に置くために戦争を繰り返していましたが、ある時戦争の悲惨さと罪悪性を痛感し慈悲と平和を説く仏教に帰依しました。仏教にもとづく政治理念を国民に知らせるために、領内各地の石柱や岸壁に法勅を刻み、人々に知らせたのです。「アショーカ王の碑文」として現在30余り発見されています。

アショーカ王の政治は、人間は皆平等という考えのもと、生物をいつくしみ、真実を語り、困窮者を助け、病院を設け、薬草を栽培し、道路に街路樹を植え、井戸や池を掘り、人民の利益と安楽を計ったのです。また、他の宗教を排斥せず、それぞれの宗教が国内に安住することを実践しました。

不思議に思いませんか？現代の政治家がマニフェストに乗せる内容が、2300年前にすでに実行されていたのです。現代予算ないのに、国債という借金をして、なおかつ実行できない。アショーカ王とは逆方向に歩いてきてしまったのではないのでしょうか？私達は何が進化して、何が退化したのか、もう一度ゆっくり考える時に来ています。過度なものや金は人間を不幸にしているのでしょうか？

## 説話

右の写真はSVAがカンボジアの民話を聞き取り、絵描きを育成し、文章を書ける人材を養成して、発行にこぎつけた絵本です。多くの子供たちに図書館で読まれたため、ぼろぼろになっていますが、カンボジアに伝わった仏教説話です。

仏教には数々の物語があります。本生物語（ほんしょう）はお釈迦さまの前世がこうだったから悟りを開くことができた、というお話。仏伝文学はお釈迦さまの伝記。そして比喩説話は仏教の教えを分かりやすく物語にしたものを指します。絵本の表紙には鳥と亀が見えるかと思いますが、さてどんな話しになるのでしょうか？

「空を飛んだおしゃべり亀」一本の棒を二羽の鳥がくわえ、その棒の中ほどを亀がくわえてぶら下がり、空を飛んでゆく。これを見つけた子供たちがはやし立てる。鳥に絶対口を開いてはいけないと約束した上での飛行だったのに、もともとおしゃべりな亀は子供たちに言い返そうとして、口を開いてしまった。亀はおしゃべりな王様の庭に落ち、大怪我をして、甲羅に亀裂が入ってしまった。それを見た賢い大臣（お釈迦様の前身）は早速王様をいさめた。おしゃべりは身を危うくするの、たとえ話しになりました。また、亀の亀甲はこうしてできました。

というのが「空を飛んだおしゃべり亀」の話です。日常生活に役立つ教えがこのような説話になりました。これらの話しがヨーロッパに伝わり、「イソップ物語」にも取り上げられ、日本に伝わると「今昔物語」になりました。私たちが読んだ童話の多くがこの仏教説話から題材をえて創られています。昔のアジアの人の優しさや厳しさ、そして知恵を感じます。



## 茶道コーナー

### 田中与四郎さんを知っていますか？

千利休の幼名です。私は千という苗字から、利休さんは朝鮮から渡来した家柄かと思っていましたが、そうではありませんでした。勉強はどこまで行っても足りないものですね。

利休さんは1522年堺の今市町で生まれたといわれています。父親は田中与兵衛、祖父は田中千阿弥。足利義政の同朋衆（文化や芸術のアドバイザー）だったとされています。そろそろ千利休という名が想像できるようになって来ましたね。祖父千阿弥は戦国時代末期、戦乱を避けて堺に移住してきたとされています。戦国の世に商業で繁栄する自由都市に移住し商売を始める武士は多かったようです。父与兵衛の時代に田中の性を廃し、千阿弥の一字をとって千を姓としました。商売は魚の卸問屋でした。

では千阿弥って、どういう意味？ 室町時代末期から南北朝、戦国時代と時代がめまぐるしく変化した時代、連歌や能、茶道などの数寄の道を究め、公家や上級武士の指南役を務めた者を同朋衆といいます。当寺は身分制度が厳格で、身分の違うものどうし同席はできませんでした。この厳しい身分制度にも抜け穴がありました。黒染めの衣をまとった僧侶です。出家であれば身分を超越できたのです。

当時、時宗という仏教の一派は名前一字の下に阿弥陀仏を付け法名としました。観阿弥・世阿弥・能阿弥など当寺の文化の最先端の方々の名前は皆ここから発していたのです。利休の祖父も法名として「千阿弥」を授かりました。時代が下がり16世紀に入ると禅宗が盛んになり、特に大徳寺が当寺の芸術と結びつきを深めました。数寄の道を志す人は大徳寺系の禅に近づいたのです。大徳寺系の僧侶は法を授かると「宗」か「紹」の字一字を加えてもらうことが慣わしになっていました。利休の茶の先生武野紹鷗も然り、その弟子の利休、つまり当時の千与四郎は大徳寺の法を授かり、「千宗易」となったのです。その後居士号「利休」をいただき「千利休」が誕生したんです。「田中与四郎」さんから「千利休」になるまでの変遷にこんな意味が隠されていました。

**松本城茶会** 最近松本市からの依頼で観光客対象の茶会が増えてきました。檀家の皆さんも私がお城でお茶の接待をしているのを見かけた方もいらっしゃるかと思います。

4月上旬の「夜桜茶会」。5月中旬の和田の「空穂記念館茶会」。8月中旬の「夏茶会」。9月中旬の「月見茶会」。10月体育の日の「5流派合同茶会」。11月中旬の連休での茶会など、合計20日間ほどの茶会になっています。松本地区表千家の茶道具を保管しているので、道具を出して、会場を作り、埃まみれになった道具を洗い、手油を拭って乾かし、仕舞うまで膨大な時間を費やします。

お茶席というと皆さんは華々しいイメージを思い浮かべるとと思いますが、裏方はスゴイデスヨー！茶道も裏方ができるようになって本物、かもしれません。

## りらの会

皆様もだいが「りらの会」という名に馴染んでいただけるようになったかと思っています。全久院にとって「りらの会」は不可欠なものです。毎週金曜日に掃除、住職のいない時の留守番、それから葬儀や法事の手伝いなどです。5年ほど前、葬儀や法事が民間の業者のホールで行われるようになり、葬儀に関しては一軒もお寺で行われない年がありました。今年は半分以上の葬儀が寺で行われるようになりました。その立役者はやはり「りらの会」です。商売としてではない、メンバーの皆さんの気配りや心使いが認められてきたのでしょう。



昨年暮れ護持会費をいただくに合わせお配りしたパンフレット見ていただけましたか？正式な場所で、きちっとした儀式を行い、それにより身近な人を亡くした悲しみを癒すことができます。しかし、便利な会場でも、とお考えの方もいらっしゃるのかもしれませんが、相当な費用が発生します。ぜひパンフレットを読んでいただき、もしもの時にそなえて心の準備をなさっておくことをお勧めします。

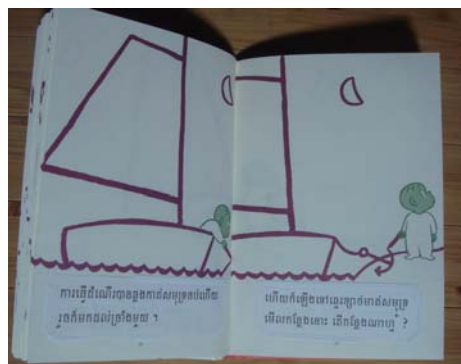
また、「りらの会」の申し込みが増えており、是非檀家の皆さまにも「りらの会」へ参加していただけるようお願いいたします。お手伝いの条件は、1時間1000円の時給の内、会へ200円ほど運営費として納めていただき、大変少なくはありますが残りの800円ほどはお礼として受けていただいております。「人のお手伝いができて、させていただける分、させていただいている自分のほうが心豊かになっているように感じます」と会員の方から言われ本当にうれしく思っています。皆様のご参加ぜひお願いいたします。



## 住職の活動

### 絵本チェック

私が常務理事を務めていますSVA（シャンティー国際ボランティア会）では東南アジアやアフガニスタンに送る絵本を作っています。日本語の絵本を現地の言葉に翻訳してシールを作り、日本語の上にもその翻訳シールを貼る作業を日本中のボランティアをお願いしています。その翻訳シールが正確に張られているかをチェックして、間違っているものを正しいのに張り直し、1月末に横浜港へ送り出します。日本全体からは18000冊の絵本が毎年送られていますが、全久院では2000冊ほどをチェックしています。下の写真のとおり、絵の下の日本語が印刷してあったところへ、カンボジア語の翻訳文をシールにして貼ってもらっているのです。



直接海外に行ってボランティアすることはなかなかできませんが、日本でできる身近な作業として、多くの方に手伝っていただいています。また、なかなか絵本を手にすることができない発展途上国のこどもに、「ぜひ絵本を読んでもらい、多くのことを学び、情操を養って欲しい。そんな手助けをしたかった」と、絵本の大好きな方も参加してくれています。人手はいくらあっても足りない作業ですので、ぜひ皆さんもお手伝いください。ご希望の方は全久院までご連絡ください。1月の中旬で作業は終わります。よろしく申し上げます。

### 宗務所庶務主事退任

宗務所というのは曹洞宗にとって県庁のような行政機関にあたります。長野県は東北信が第一宗務所、中南信が第二宗務所と二つに分かれています。その第二宗務所の会計を担当するのが庶務主事です。庶務ですから、いわば何で



も屋。研修会でお経の唱え役をしたり、研修会場や懇親会の席をアレンジしたりと、言われたことは何でもする係です。

任期は4年で昨年12月11日をもって、何とか次の方々へ役をお渡しすることができました。父も16年前第二宗務所の所長を務め、その時書記という事務全般を担当する役をしましたので、この会の動きを大体把握しているということで、庶務主事に起用されたのですが、十数年の時間の経過は宗教界にも大きな変化をもたらしています。どんな変化が起こりつつあるのか、それにどのように対応してゆくのか、もっと勉強しなくてはならない材料を手に入れたと思います。

## 俊浩本山奮闘記

俊浩は本山修行も4年10ヶ月となり、現在堂行寮にいます。堂行は本山内の法要を司ります。朝夕のお勤めや特別法要などで、お経を読み始めたり、鐘や木魚を鳴らし修行僧の読経を先導します。それ以上に重要なのは修行僧全体を取りまとめる役です。



上の写真は昨年11月妻の両親を連れて朝のお勤めを見学したときのものです。1時間半ほどのお勤めの間木魚を鳴らし続けた直後、額の汗をぬぐった俊浩です。本堂の外側からしか撮影できないので後姿になっていますが、木魚の前に座っているのが俊浩です。木魚の右下からバチの白い頭が出ていますが、人の頭ほどの大きさですから汗が噴出すのも当然でしょうね。総持寺の朝のお勤めのお経は何種類もあり、それぞれが違うスピードだったり、途中からスピードが変わったりします。みんなの読経を先導するのが木魚の音ですから責任重大です。

また、下の写真のように法要の導師さまを先導するなど本堂の中で何をするか知り尽くしていないとできない係ですから、修行僧にとってはたくさんの経験を積んだ先輩ができる、憧れの役ということになります。その分責任も重くなります。常に勉強してどんな動きもできるように準備してはなりません。



そんな俊浩を応援に行く企画をしました。今年は総持寺が能登お門前町から鶴見へ引っ越して100年になります。その記念の法要が3月から11月まで続きます。そのため俊浩は重要な人材として、本山修行をやめて帰ることのできないリストに載せられています。ですから今年いっぱい少なくとも全久院には帰れません。そのお祝いの法要を7月25日の朝お勤めする役を私もいただく

ことができました。24日本山に宿泊し本山の精進料理をいただき、25日朝お祝いのお勤め皆さんの先祖供養のお勤めの導師を私が行い、皆さまに焼香をしていただきます。本山に宿泊し、修行僧が作り出す独特の空気をいただき、清々とした本堂でのお勤め体験してみませんか。

俊浩がいますのでいろいろに融通が利きますから、一般の旅行参拝ではできない体験ができるかと思っています。ぜひご参加いただきたいと思っています。

蝶々夫人といえばどなたでも「あ〜る晴れた〜日〜」と口ずさむほど、日本人に聞き慣れたオペラは他にありません。しかし、別名「ソプラノ壊し」といわれるほど、高音が続き、声量を要求されるので、練習の間だけでソプラノ歌手の声がつぶされてしまう。それほど過酷な曲であり、この別名が付けられているのです。それだけにソプラノ歌手にとっては真価を発揮できる曲であり、その「蝶々夫人」の公演は長年の夢でした。

今までのオペラ公演を創りあげる中で巡り合った、演奏家や声楽家、音響、舞台、照明、道具製作で舞台を創り上げてくれる方々の力を借りて「蝶々夫人」公演ができるところまでたどり着きました。また資金的にも協賛や協賛広告などで協力いただける方にも巡り合い、多くの方々の力を借りて、この公演ができることになりました。右の写真は音楽指導をしてくださる沢木先生（東京のリリカ・イタリアーナ主催・声楽の指導を受けている）と、当日の伴奏をしてくれる、ピアノの堀内さん、チェロの嘉納さん、バイオリンの近藤さんの練習風景です。オーケストラを呼べばそれだけで1000万円以上の予算がかかってしまいます。予算のない私たちには強力な演奏家の皆さんです。



「蝶々夫人」は、明治時代の長崎、小高い丘の上の家から物語が始まります。アメリカ海軍士官ピンカートンは結婚仲介人ゴローの斡旋で、没落氏族の娘で15才の芸者、蝶々と結婚した。彼にとっては日本滞在中だけのかりそめの妻。アメリカ総領事のシャープレスはその軽薄な考えをたしなめるが、聞く耳を持たない。が、蝶々はキリスト教に改宗するほどこの結婚に人生を懸ける。結婚式の席上僧侶である、叔父のボンゾに改宗をなじられ、親戚一同からも縁を切られる。すがれるものはピンカートンのみ。しかし帰国してしまう。残された蝶々は女中のスズキと苦しい生活。周囲からの心無い中傷や再婚の勧めにあいながらもひたすらピンカートンを待ち続け3年、ついに悲劇の結末が・・・

「蝶々夫人」は、明治時代の長崎、小高い丘の上の家から物語が始まります。アメリカ海軍士官ピンカートンは結婚仲介人ゴローの斡旋で、没落氏族の娘で15才の芸者、蝶々と結婚した。彼にとっては日本滞在中だけのかりそめの妻。アメリカ総領事のシャープレスはその軽薄な考えをたしなめるが、聞く耳を持たない。が、蝶々はキリスト教に改宗するほどこの結婚に人生を懸ける。結婚式の席上僧侶である、叔父のボンゾに改宗をなじられ、親戚一同からも縁を切られる。すがれるものはピンカートンのみ。しかし帰国してしまう。残された蝶々は女中のスズキと苦しい生活。周囲からの心無い中傷や再婚の勧めにあいながらもひたすらピンカートンを待ち続け3年、ついに悲劇の結末が・・・

松本市は音楽の都といわれていますが、長野県内在住の音楽家や舞台関係者だけで、企画から協賛集め、チケット売りまでして、一から作り出してゆくオペラは他にはないと自負しています。オペラは総合芸術です。歌、演技、大道具・小道具、照明、音響などが総合されて初めてステージになります。田舎のお寺の大黒がどこまでのステージを創りあげて行くかぜひご注目いただきたいと思います。全久院は前住職のときから表千家の茶道を行っています。日本古来の芸術文化を当して多くの方に巡り合い、文化が地域社会に及ぼす影響を強く感じてきました。今回はオペラという文化を通して、地域の皆さんと交流をもてたらと考えています。

松本という土地柄ゆえ、それらの技術を高いレベルで持つ、言わば「職人さん」が居るからこの様な公演が可能になるかと思えます。沢木先生も「地元だけでこれだけのオペラ公演をすることは日本中他にはありませんよ」と高く評価して下さいます。全体の予算は3～400万円。斉藤記念オペラのように数億円かける公演とは違いますが、地元の繋がりと、知恵をフルに使って創造する「蝶々夫人」をぜひ見て、聴きにきていただきたいと思えます

チケットは全久院と芸術館んカウンターにあります。よろしく願いいたします。



## 掲示板

(皆様のご参加お待ちしております)

### 檀信徒護持会新年総会

1月22日(土) 4時より全久院で開催します。全久院の催しに参加していただいている方々など、より多くの方に参加していただきたく企画しています。茶道部の皆さまの協力により、3時より茶室にて薄茶を差し上げます。お正月の新たまった飾りつけの中、日常とは少し違った雰囲気を楽しむ、檀家の皆様にも堅苦しくなくお茶に触れていただこう思います。4時より本堂にてお参り、その後



座禅会の皆様と5分間座禅、4時15分より護持会総会、4時半より懇親会となります。総会は皆さまから頂戴している護持会費の会計報告など承認いただき、懇親会ではご詠歌の皆さんと観音講の方によるご詠歌の奉詠を数曲お願いします。また南こうせつさん作詞作曲の「まごころに



生きる」を皆さんで合唱します。次に観音講の皆さんで歌っている唱歌を何曲か、みなさんにも歌詞を配り合唱していただこうと思います。一年の初めを皆さま心豊かに過ごし、良い年であるよう祈念したいと思います。総代様のお顔を覚えていただいたり、人柄に触れていただき、全久院のことをいろいろ語り合いたく思います。皆様の参加お待ちしております。参加希望の方は1月20日(水)までに電話でご連絡ください。

### 青山俊董師特別講演会

2月6日(日) 3時から6時まで  
参加費500円

座禅会主催により、座禅会で勉強している「従容録」をもとにお話しをいただきます。曹洞宗では「従容録」は坐禅のテキストに当たります。お釈迦さまや達磨さまや、中国の歴史上有名な老師さま方がどのように悟りを開かれたか、お弟子さま方とどんな禅問答をされたかが解説されており、修行の手助けとなる書物です。難しいお話と思われそうですが、青山師の体験談などを交え分かりやすくお話いただきます。また私たちの生き方にも多くの示唆をいた





だけです。お話しを聞きたいという方は檀家さま以外の方でもご自由に参加できますので、お誘いあわせておいください。

### 本年度特別企画 本山体験旅行

今年、総持寺が能登お門前町から鶴見へ引っ越して100年になります。その記念の法要が3月から11月まで続きます。7月25日の朝そのお祝いの法要をお勤めする役を私もいただくことができました。24日本山に宿泊し、本山の精進料理をいただき、25日朝お祝いのお勤めと皆さんの先祖供養のお勤めの導師を私が行い、皆さまに焼香をしていただきます。本山に宿泊し、修行僧が作り出す独特の空気をいただき、清々とした本堂でのお勤め体験してみませんか。本山で修行中の俊浩は修行が長く、本山での役を努められる人材として、本山修行をやめて帰ることのできないリストに載せられています。ですから今年いっぱい少なくとも全久院には帰れません。単なる観光では触れることのできない本山修行の一面を皆さまに体験していただけるよう考えています。2日目は伊豆半島でも日没の風景のすばらしい堂ヶ島温泉で日ごろの疲れを癒していただけるよう宿を取りました。ぜひご参加いただけたらと思います。申し込は全久院までその旨お電話ください。お願いいたします。

### ．．． 座禅会 ．．．

2月6日(日) 3時より青山俊董師講演会・3月19日(土)・4月23日(土)・5月21日(土)・6月25日(土)・7月9日(土)・9月3日(土)お粥と精進料理・以上が上半期の日程です。毎回夕方4時集合4時40分まで青山俊董師の市民タイムスのコラム「従容録」を住職が解説し、5時45分頃まで座禅、6時まで茶話会という予定で行います。9月3日はお粥と精進料理を経験していただきます。座禅を経験していただきながら、混迷する現代、自分を見失ってしまいそうな日々を、もう一度自分の時間を取り戻して、ものの見方や生き方をゆっくり考えてみることは是非必要と思います。そんな時間に身をおいてみませんか。

### ．．． ご詠歌会 ．．．

2月10日(木)・3月10日(木)・4月14日(木) 2時より・5月12日(木)・6月9日(木)・7月7日(木)・9月15日(木)

午前10時より11時半まで、白板 東昌寺副住職 飯島恵道師にご指導いただきます。ご詠歌の検定を受けたり、ご詠歌の全国大会や全久院のお盆法要、新年会、和合会の花祭りなどに参加したりお楽しみもいろいろあります。上記の日に突然来ていただいても結構です。一緒にいかがですか。

### ．．． 観音講 ．．．

毎月17日10時から12時半まで行います。10時から観音様にお勤め、10時20分からご詠歌、10時50分から大黒の指導で唱歌の合唱、11時20分より大黒手作りの野菜中心の食事という日程です。現在15人ほどの参加者がいます。気寄りが良く60代から90代の方が元気に集まって来ます。気楽な会ですのでぜひご参加ください。